

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者 大西 浩

池田工業高等学校

ゲームで登山のリスクを学ぶ・・・テント生活に最適グッズ

今月初旬に登山研修所の講師をしていたときの話である。研修会の打ち合わせをするために前泊した。そのときに、村越先生が「私が考えた『山岳遭難ゲーム』をしませんか」と取り出したのは、先生自作手作りのカードゲームだった。その場に居合わせたのは講師仲間の面々。最初はみんな「えっ？」という表情だったのだが、「やってみましょう」ということになった。

村越先生は、今月号の岳人に「危機管理——遭難回避のための方法論」という記事を発表されるなど、最近では山岳地帯での「リスクマネジメント方略」についても積極的に発言されているが、先生の考案されたカードゲームは、ゲームを通じて登山のリスクを学べるようになっていたものだった。趣旨は「登山は楽しみと同時にリスクの多い活動であるにもかかわらず、遭難のリスクやそれに対する有効な対処法は、一般登山者に十分知られているとは言えない。このゲームは楽しみながら、山岳遭難とその対処法の基本的知識を身に付けられるように工夫した」というものだ。ちょっと紹介しよう。

カードは全部で100枚ほどある。カードには季節カード、山カード、獲得標高カード、リスクカード、ハザード（リスク増幅）カード、リスク回避カードの6種類があり、最初に各自が山カードを引き、自分の登る山を決める。山カードにはそれぞれに登山口の標高と山頂の標高が明記されており、例えば富士山ならば登山口標高は2500m、山頂が3776m、高尾山なら登山口標高は0m、山頂は599mと山によって獲得すべき標高が異なっている。また山により、季節により現れてくるリスクも異なっているが、それらを回避しながら、最初に獲得標高の累積が自分の目指す山のそれを越えた人が出た段階で競技は終了、その山の標高が得点となり、他のプレイヤーは手持ちの獲得標高カードの数値がマイナスとなるというゲームである。各自の山が決まったら、場の季節を決めて、準備は完了。余った山カードを除いたすべてのカードをシャッフルし、1人6枚ずつ配布し、残りは中央に山として重ねて置いておく。

準備ができたら順番を決め、いよいよゲーム開始。自分の番が来たら、中央の山から一枚引き、一枚を捨てる。捨て方は、1) 自分の場に獲得標高カードをつける 2) 人の場にリスクやハザードをつけて邪魔をする 3) 自分の場に付けられたリスクやハザードに対して対処可能なリスク回避カードを付けてリスクを解消する 4) どこに付けるカードもない場合任意のカードを無効カードとして中央にそのまま捨てる 5) 季節カードが手札にある場合、適当なときに場に捨てて、季節をかえる。の5パターンがある。こうして自分の標高を稼ぎながら他人が登りつめないように時には邪魔をしながらゲームを進行させてゆく。リスクにも2段階あり、即回避が必要(◎)か否(○)かで対応が異なる。◎のリスク(例えば「冬の低体温」)になった場合は、自分の番が来たときに対処可能なリスク回避カードを出してリスク回避できなければそれまでの獲得標高はすべて無効となり、また最初から登り始めることになり、○の場合は対応できるまでその標高から先へは進めない。

と、これがゲームのあらましであるが、やりはじめたらやめられない。極めてよく考えられていて、獲得標高カードは300mから800mまで各種あり、リスクカードには道迷い、滑落、転落、落雷、低体温症など11種類があり、ハザードカードには悪天候、岩場、60代以上など想定されるリスクとそれを増幅する要因が盛り込まれている。リスク回避カードにはオールマイティな「救助隊」があるかと思うと、落石や転落・滑落にのみ有効な「ヘルメット」、比較的対応範囲が広い「地図とコンパス」や「トレーニング」「山小屋」など実際の山に登っている感覚を取り込みながら作られているため、山については一家言もっている研修所の講師をして「面白い」と、みんながはまった上、さらによくするためのいくつかの提言もあった。

先生の思惑はいろいろな人に試してもらいながら、もっとリアルなものにし、カードにも絵柄を入れたりして、全国の登山用品店などで販売、実際に山のリスク回避に役立たいというところにある。実現すればリスクマネジメント方略に一役買うことは必定。先生としても実際に使った人の反応を知りよりよいものにしたいとのことであった。ゲーム好きで「目が肥えている」高校山岳部員がこのゲームをどう感ずるかというのもこのゲームが世に出るかどうかの一つの試金石。そんなわけで、先生から「2セット持って来てますからどうぞ！」と、そのゲームを一組いただいて帰ってきたのだった。

先日の本校山岳部のミーティングの際、実際に生徒たちと一緒にゲームをやってみた。ミーティングの時にもゲーム機を持ってくるようなゲーム好きの生徒にとって、これまでくどくどとしてきた説明も、実際にカードを見ながらすれば3分もあれば充分で、あとは実際にやりながら「雲取山ってどこにあるんだ」「とりあえず転落カードつけといてやるか」、「俺のところばかり邪魔するな」「えーと、600m登ったからあと800mだ」

「山小屋カードで病気を回避」「今の場は冬だから熱中症はだめ」など時には算数もしながら、面白がってやっていた。停滞を余儀なくされたテントの中でも、暇を持て余すことなく山の知識を身に付けられる。もしこのゲームに興味のある方がいらっしゃったら、ご連絡ください。「組織や山岳会などで実施できる方には提供します。提供した方にはフィードバックをお願いしています。」とのことですので、村越先生に取り次ぎます。

編集子のひとりごと・・・李建華さん、楊晶さんを囲んで

かわらばん498号でご紹介した聖域巡礼の著者李建華先生が先だって来日され、長野にもお見えになった。田村宣紀さんから「歓迎のうたげを行うので一緒にどうですか」とのお誘いがあったので、一も二もなく出席した。李先生の奥様の楊晶先生も一緒に来日であり、歓迎会は田村さんの主宰する山学山遊会のメンバーが集まり、手作りの料理で歓迎した。僕はすっかりいただく側、お客様になりさがっていたが、飯綱にある田村さんの別荘で、夜の更けるのも忘れ旧交を温めた。

秘密保護法案を衆院で強行採決した安倍政権は、韓国との仲もすっかり冷え込み、中国との関係も糸口を見いだせないでいる。「積極的平和外交」なるまやかしの言葉で、着飾った安倍内閣の危険性が、日に日にその実態を明らかになってきている。いたずらに中国の脅威をあおるがごときマスコミも含め、なぜ、「国家」が出てくるとこういう関係になってしまうのだろうか？しかし、ぼくらの友好関係には一点の曇りもなかった。酒を酌み交わしながら腹藏なく語り明かした。こういう個人対個人の関係の中から、少しでも両国関係の改善が図られることを切に望む。